

川端康成『眠れる美女』論

—死によつて完結する美—

稲垣達也

はじめに

『眠れる美女』は昭和三五年の一月から六月にかけて「新潮」に掲載され、中断された後に昭和三六年一月から一月まで同誌に書き継がれ連載された^{注一}。波高い海辺の宿にある館にて、老人と眠らされている女との夜を描く小説である。

三島由紀夫はこの作品について「偉大な作家には、おもてむきの傑作と裏側の傑作とがあるらしい。頭教頭仏的傑作と、密教的秘仏的傑作と言ひかえてもよい。川端氏にとつては『雪国』がそのおもてむきの傑作であれば、『眠れる美女』は正にその秘仏的傑作なのである^{注二}。」と述べている。事実、作品の中で取り上げられている処女崇拜と死のテーマは『雪国』や『山の音』と連続性を

持つている。また、川端は当時六二歳という老齡に達しており、作品の主人公である江口も老人に設定されていた。加えて、江口が女と寝るときに睡眠薬を飲むことも、当時の川端が睡眠薬中毒であったことと一致している。作者の思想と作品の間には深いつながりがあると見てよいだろう。

この研究では作品の中にある作者にとつての美とは何なのかを解き明かしていきたい。

一

『眠れる美女』は五部構成になっているが、各部の内容は構成において似通っている点が多くある。これは川端の作品の特徴として、どこで作品が終わってもいいよ

うに作品を作っているという傾向のあらわれであり、この作品が作者にとつて閉塞的な性のめくるめく世界から、美とは何なのか見つめるという共通の主題を軸に書かれている証左であろう。

まず、どの部でも導入は主人公の江口老人が海際にある家を訪れる場面から始まる。その家にたどりついた江口は、その家の管理人である女より倶楽部のルールに関する説明や注意を受け、部屋へと案内されるのである。

「眠っているあいだに、いい夢を見たというお客様もございますよ。若い時を思い出したというお客様もございますよ。」とさつきの女の言葉が浮かんできても、江口老人はにが笑いも出ない顔で、机に片手をついて立ち上がると、隣室へ通じる杉戸をあけた。

「ああ。」

江口の声が出たのは、深紅のびろうどのかあてんだった。ほの明かりなのでその色はなお深く、そしてかあてんの前に薄い光の層がある感じで、幻の中に足を踏み入れたようだった。

娘の匂いが漂ううちに、ふっと赤んぼうの匂いが鼻に
来た。乳飲み子のあの乳臭い匂いである。娘の匂いよ
りもあまく濃い。

ここで深紅のカーテンで囲われた部屋という状況に着目したい。深紅、という赤よりも生々しい色に覆われた寝室。そこで眠る様子を思えば、どうしてもこの部屋が子宮をあらわしているという考えに行き着く。事実、江口老人は初めてその部屋に入った際に「乳呑子のおいがした。」「娘の匂いよりも甘く濃い。」と述べている。つまり江口老人はこの部屋に入ること、生誕のための部屋である子宮のなかで睡眠という死と結び付けられる行為を行う。彼は死と生の狭間の空間という別世界にいななわれているのである。

こういった子宮を隠喩する描写に結び付けて論じられるのは、人間が根源的に持つ胎内回帰願望を表しているのではないか、という点である。では、この描写に胎内回帰願望の意味を含ませているとして、具体的にはどの

ような意味があるのだろうか。一つ言えることとして、ぬぐい切れない寂しきや不安感を引き立たせる効果があるだろう。作中、江口老人は何度も自分自身に情けなきを感じたり、老いることそのものへの絶望を感じたりしている。これは江口老人が部屋の外でも感じていたものではあるが、そういった負の情動が胎内という安心できる空間で自分と対極にある若い女性と向き合うことで強調され、より引き立たせているのだ。前述したように、川端の作品傾向として、どこでも話を終わらせることができるような構成が大きな特徴としてある。川端が作品を通して自己探求を納得できるまで続ける構成として、江口老人の内面とおおよそ正反対な状況を用意したのである。

部屋に入った江口老人はその部屋の中で毎回違う女性と相対する。そこで江口老人は眠っている女性を通して自分の人生を思い返し、自己嫌悪と女性への信奉に溺れながら睡眠薬を飲み眠りにつく。

江口は錠剤を眺めているうちに、乳についてのいやな思い出と狂わしい思い出とがうかんできた。

江口老人は限りなく生死に近い空間で自身と対極にある美しい女を見つめながら自身の過去を回想する。そして自分の過去の女の姿を眠っている女に重ねながら性と醜さについて考えているのである。この小説が秘仏的傑作として評価されているのは、この背徳的な状況下から美しさを見つめているからであろう。「雪国」が愛という視点から美しさを見つめた表の作品であるならば、「眠れる美女」は性欲という裏の視点から美しさを見つめている。

五回にわたって家を訪れ女と寝た江口であったが、五回目の夜に、あるそれまでにはなかった事態が発生して、物語は唐突に終わりを迎える。それが第五部における黒い娘の死である。

第五部はそれまでの部と明確に違う部分がいくつか存在する。今までは倶楽部の運営をしている女と会話している場面から話が始まるのだが、今回だけは江口老人からとある質問をする場面からはじまっている。

「死霊が部屋の中にいるんじゃないの?」

女は肩をぴくつとして老人を見た。顔色が失われていった。

(中略)

「どうせ、あんなことは起こるだろうね。冬は老人にあぶないんだから……。寒中だけ、この家も休むことにしたらどうなの?」

「……………」

「どんなお年寄りが来るのか知らんが、もし第二、第三の死が続くと、君だってただではすまないよ。」

それまで死までのモラトリアムに揺蕩いながらも生を

甘受していた江口老人が、明確に死に至ったであろう老人の話を知っている。今までは背徳的で異常な状況下でも実際に死ぬようなことはなかったものの、周りに死者が出始める。この自身ではなく周りに死者がでてくる状況は当時の作者の状況を思い起こさせる。終戦以降、彼の同期の作家は亡くなっている人も多い。いままで眠っている女を見ながら死と性の醜さを見つめていた江口老人と川端の輪郭が、接近しだしていることを読者は感じるのである。

そしてこの夜、江口老人は初めて二人の女と夜を過ごすことになる。肌の黒い娘と白い娘である。いままで夜を共に過ごした女は一人であったことを考えると、ここで女が二人であることには意味があると考えるのが自然である。江口老人が川端を投影した存在であるとしたら、黒い娘と白い娘は何なのだろうか。

私が思うに白い女は白紙の紙であり、黒い娘は完成した小説なのだ。根拠となる描写はいくつか存在するとみているが、このように読みといた最大の理由は黒い娘が死に、白い娘と取り残される最後にある。

私は五部を読むまで疑問に思っていたことがあった。それは小説の題になっている「眠れる美女」とは何を示す存在なのだろうか、ということだ。老いた老人に対して若い女という対照的な存在を置いたのかと考えていたのだが、女は眠っていて対象的な存在として老人に何かを働きかけるわけではない。しかし江口老人に対して自問自答を促す存在でもあった。そして川端という作家が自問自答をしながら向き合い続けたものが何かを考える、と、「眠れる美女」がすなわち川端にとっての小説の隠喩であつたと思ひ至つたのである。

川端は自身の随筆「文学的自叙伝」^{注三}で次のようなことを述べている。

私は經典を宗教的教訓としてでなく、文学的幻想としても尊んでいる。「東方の歌」と題する作品の構想を、私は一五年も前から心に抱いていて、これを白鳥の歌としたいと思つている。東方の古典の幻を私流に歌う

のである。書けずに死んでいくかもしれないが、書きたがっていることだけは、知ってもらいたいと思う。

女と眠る寢室は、胎内を思わせる場所でありながら、その場所で江口老人は死を思う。この、死と生が同居している世界観は輪廻転生の考えを持つ仏教のものと合致する。胎内という神秘の世界で江口老人のまえにただありながらも問いかけてくる女性に象徴的であり、仏像や御神体を思わせ、その空間はまさに川端が書きたかつた東方の古典的世界なのである。しかしそうすると矛盾が生まれる。この空間において「娘」象徴であるならば、死亡するということはあるかないからだ。根幹である象徴がなくなるといふことはその空間の破綻を意味する。よつて娘は構成要素でありながら複数存在する物言わぬもの、經典に該当する存在であり、この作品においては川端の編んだ「東方の歌」、小説なのである。

ここまでわかれば、何故最後の夜に黒い娘が死に白い娘は死ななかつたのかに説明がつく。黒い娘は死によつ

て完結し、作品として完成したのである。白い娘がいわゆる「白紙」を表していると考えることもでき、黒い娘はその白紙が文字で埋まっている状態、ということを示しているであろう。

完結し川端にはどうしようもない存在になってしまった娘は運び出され、未完成の娘と部屋の中に取り残される。それは一つの小説が完結した後も川端の自問自答は終わらない、という作家の業をしめした最後なのだろう。

四

この作品が発表された当時は戦後の動乱のさなかにあった。川端は終戦まもない昭和二二年一二月、新感覺派時代からの知友横光利一の死に遭い、その弔辞のなかで「僕は日本の山河を魂として君の後を生きていく」と述べ、自己の運命を悟ったかのような姿であったことが有名である^{（注四）}。事実、彼はこの後みずからの余生を「日本への挽歌」と書き綴っていきたいと夥しいまでの文章を書くことになる。

戦後、日本の形は良い方向にも悪い方向にも大きく変化を繰り返していくことになる。その戦後を生きながら川端はなんとか日本という姿を残すために文学活動を繰り返していくこととなった。

その成果の一つとして『古都』^{（注五）}という小説がある。この作品は川端の作品としては、しばしば評価が低いとされる。話の筋というものが薄く、内容としては京都の風習や名物の描写に軸足が置かれており、文学としての価値は低いとされていた。しかし後にノーベル文学賞を受賞する際にこの作品が、海外では川端が受賞した要因となる作品の一つとして紹介されるなど、諸外国での評価は低くない。いかに日本の文化を保存することを考えていたのかわかる逸話だ。

こうして戦前の日本と向き合い続ける川端の目は常に過去を向いている。『眠れる美女』においても江口老人が思い出すのは若かりし自分の過去だけであり、未来に向かつて何をしようとは考えていない。この静かに死を受け入れる諦観が作中に漂う退廃感を助長しているのであろう。

このような前提を踏まえれば、「眠れる美女」の終わり方にも説明がつく。完結した小説を運びだされた江口老人はどうすればいいのかわからず困惑している。眠る、つまり死ぬこともできずただ茫然としている、つまり彼（川端）にとつて、もはや小説を書く以外になすことはなく、それが終わった後にすることは川端にもわからず、自分にもわからないことは小説に書くことができない。ゆえにその場面で作品が完結するのである。

おわりに

老醜と迫りくる死にもだえる老人の視点より描かれた小説から、川端の美のとらえかた、そして小説というものの作家としての考えを知ることができた。川端にとつて小説とは美であり、小説を書くということは美を探求することなのである。

〈参考文献〉

注一 『川端康成研究』 今村潤子著 審美社 一九八八年五月初版

注二 『国文学 解釈と教材の研究』 第一五巻第三号

一九六八年九月初稿

注三 『川端康成 作家の自伝一五』 羽鳥徹哉編 日本

図書センター 平成六年一〇月

注四 『川端康成の人間と芸術』 川端研究会著 教育出

版センター 昭和四六年四月

注五 『古都』 川端康成著 新潮社 第百刷（平成二二

年一月改版）

* 『眠れる美女』本文引用は、新潮文庫『眠れる美女』（昭和四〇年一月）に拠った。

* 本論は令和二年一月に提出した卒業論文の一部をまとめたものである。